

令和8年企画展

～二・二六事件から90年を経て～

「Why was he  
targeted?」  
なぜ彼は狙われたのか?

開催期間／令和8年2月26日(木)～令和8年5月31日(日)

奥州市立斎藤實記念館

今から90年前の1936年、昭和11年2月26日に起こったクーデター事件で斎藤實は銃撃を受け帰らぬ人となった。現在では事件の概要は多方面において解析され明らかになっている。決起部隊を率いた陸軍の青年将校たちが掲げた『昭和維新』とはどのようなものだったのか。

事件前に噂を聞いた知人から警備の厚い官舎への移動の助言を受けた斎藤は「殺される時には何処にいたって殺されるよ」「殺されたっていいじゃないか」と返答したという。その斎藤の言葉からは武士の心構えにも通じたものを感じる。水沢伊達氏の家臣の家に生まれた實は幼いころ祖父から水沢藩祖といわれた「宗利」家臣の殉死の話を聞く。その際聞いた「武士というものはどんな大きなことが起こって来てもまた死ぬ間際までも平常と少しも変わらず顔色一つに静かに死につくという位の落ち着きと度胸がなくてはいけない」という言葉。その言葉を胸に置きその志を生涯貫いたのではないだろうか。武士として主に仕えるように、軍人としてその身を国家に捧げ、明治・大正・昭和と歴代の天皇に仕え、内大臣として昭和天皇の側近であった斎藤實。忠臣の最たる人物の斎藤が何故真逆の奸臣として狙われなければならなかったのか。

事件から90年を経た今、平成元年に新たに公にされた句坂資料をも加えた上で改めて實の人物像を紹介するとともに「二・二六事件」を再考察する。

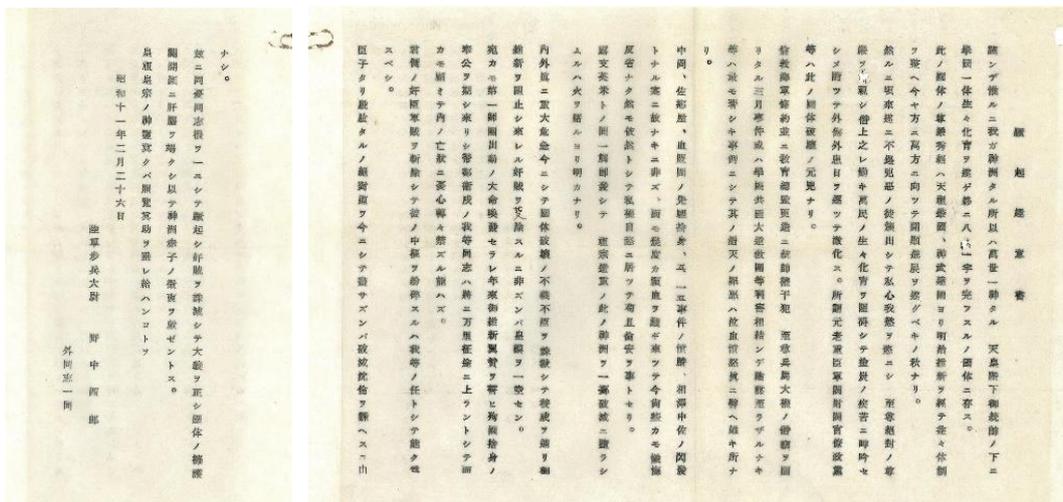


「内大臣 正装姿」



「襲撃を受けた四谷私邸」

二・二六事件を計画した決起部隊は決起の理由を「<sup>けっしきしゆいしよ</sup>蹶起趣意書」にまとめ天皇に伝達しようとした。趣意書は野中四郎の名義になっているが、野中の文章を元に村中が草案を書き西田が村中と話し合って書き上げたものと言われている。安藤と野中は事前に皇道派の山下少将に見せ公認されたとの認識を深める。この「蹶起趣意書」は襲撃部隊と別に行動していた陸軍大臣官邸を占拠した村中や磯部らによって川島義之陸軍大臣と会見し要望事項とともに読み上げられる。その後天皇に拝謁した川島陸軍大臣は趣意書を読み説明するも、天皇に「速二事件ヲ鎮圧セヨ」と命じられる。



「蹶起趣意書」  
決起二日前に北一輝の自宅で書かれたもの

二・二六事件が起きた当時日本は「昭和恐慌」といわれる経済不況の立て直し期にあった。不景気が続き貧富の差が激しく財閥と呼ばれる富裕層は富を蓄積し、社会不安が増大していた。政党は党利党略にはしり信用を失い、多くの国民は政治というものを見放していた。国家革新を求める陸海軍軍人と民間右翼が結び付き過激化し首相の暗殺計画やテロ・クーデター事件が相次いで起きるようになっていた。

第一次世界大戦後の激変する世界情勢の中、1930（昭和5）年にロンドン海軍軍縮会議において日本代表団は日本政府が希望した補助艦の保有量を達成出来ず条約に調印したことから「統帥権干犯問題」の声があがる。初めは大日本帝国憲法第11条に違反するとして野党が抗議した政争であった。しかしその後、天皇の統帥権を犯すことは断じて許さないという「天皇親政」への国家改造を目指す青年将校の強い思いが北一輝の「日本改造法案大綱」思想に影響され、「昭和維新」という目的を生んでいく。

陸軍は高度の国防国家建設のため軍と国家の近代化を実現せねばならぬ使命感にかられていた。だが、天皇親政の実現のためには武力を用いても軍部独裁政権を樹立したいという過激な考えを持つ「皇道派」と国家の全力を戦争に総動員する体制を整えようとするエリート幕僚たちが構成する「統制派」が抗争を続けていた。

昭和9年秋に統制派が発行した「国防の本義と其強化の提唱」と題したパンフレットにおいて、国家改造はしかるべく手段を踏んで行うものと皇道派の直接行動を牽制した。同年11月の「陸軍士官学校事件」で更に皇道派を追い詰めることとなり、翌年8月、真崎教育総監の更迭問題に及び陸軍の三長官の最高位から外された皇道派は後任の統制派の永田鉄山を暗殺する「相沢事件」が起こる。事件を起こした相沢三郎中佐の「道徳と愛国心」は世論から称賛を受ける。そうして「二・二六事件」が起きるのである

事件決起の直接的なきっかけは第一師団の満州への派遣である。事件を計画していた首謀者の多くは第一師団におり渡満前の2月26日未明の実行が決定した。

昭和初期から事件までを出来事を時系列に表にまとめると下のようになる。

1929	昭和4年	10月 世界恐慌（ニューヨークのウォール街にて株式市場が暴落）
1930	昭和5年	4月 ロンドン海軍軍縮会議
	11月	浜口雄幸首相が右翼団体愛国社黨員に東京駅で襲撃される（統帥権干犯）
1931	昭和6年 3月	『三月事件』 橋本欣五郎陸軍大佐、大川周明らが浜口内閣を倒し、宇垣陸相を首相とする軍事政権の樹立しようと計画したが、宇垣陸相が同意せず未遂におわる
	4月	若槻禮次郎内閣 発足
	9月	満州事変
	10月	『十月事件』 橋本欣五郎陸軍大佐、大川周明らが三月事件より規模を拡大し、槻内閣を倒し荒木貞夫陸相を首相とする軍事政権の樹立をけいかくするが、計画が漏れ未遂におわる
	12月	犬養内閣において荒木貞夫（皇道派）が陸軍大臣に就任
1932	昭和7年 2月	『血盟団事件』 日蓮宗僧侶井上日召が組織した血盟団が前大蔵大臣井上準之助と三井財閥の団琢磨を殺害
	5月	『五・一五事件』 血盟団の井上の影響を受けた古賀清志ら海軍青年将校などが首相を襲撃し、クーデターによる国家改造を計画する
1934	昭和9年 1月	斎藤内閣において林銑十郎（統制派）が陸軍大臣に就任
	7月	岡田啓介内閣 発足
	10月	陸軍パンフレット（「国防の本義と其強化の提唱」）問題 統制派が皇道派をけん制したもの
	11月	『陸軍士官学校事件』 磯部浅一、村中孝次ら皇道派青年将校と陸軍士官学校生徒重臣・元老の襲撃計画を立案したとされ、磯部、村中が免官となる
1935	昭和10年 7月	教育総監真崎甚三郎（皇道派）を更迭、後任に永田鉄山（統制派）を任命
	8月	『相沢事件』 相沢三郎陸軍中佐が皇道派の真崎甚三郎教育総監の更迭は統帥権干犯にあたるとして後任の永田鉄山を殺害
	9月	岡田内閣において陸軍省内で事件の綱紀粛正のため首脳部の交代がなされ、中立の立場の川島義之が陸軍大臣となる
	12月	斎藤實内大臣に就任
1936	昭和11年 2月26日	二・二六事件

ここで、「斎藤實」とはどんな人物であったのかを紹介したい。

【ジョセフ・クラーク・グルー】1880（明治13）年～1965（昭和40）年  
ボストン生まれでハーバード大学卒業し国務省に勤務。1932（昭和7）年から  
駐日大使となるが、開戦をきっかけに帰国。斎藤實とは総理大臣時代から親交  
が深く著書の中に記されている。



「滞日十年 グルー氏著書」

一九三六年二月二七日

恐ろしい時であり、私はたった今、斎藤家弔問という悲  
壮な経験を済ませて帰って来たばかりである。(略)彼は  
安らかに眠っているようだった。われわれはどれほど彼を  
愛し、彼を尊敬したことだったろう。彼の顔からは愛嬌の  
いい微笑が消えたことなく、彼の白髪は、彼が高い位置や  
有益な生涯で獲得した高貴さとは全く別な、高貴さを彼に  
与えていた。

一九三六年三月一日

(略)これが一九三二年の六月、最初に首相兼外相代理  
としての彼を訪問した時以来の友情の終りになった。

(略)彼は愛すべき人物だった。物静かで魅力があり、実  
に礼儀正しかったが、同時に好戦的争闘の時代にあって偉  
大な叡智と広い自由主義的な意見を持っていた。(略)

【ハーバート・ウェルチ】1862（文久2）年～1969（昭和44）年

アメリカのメソジスト教会監督であり、教育者。1916年から1928年につ  
けて日本と朝鮮のメソジスト監督を務め、青山学院大学の第2代院長としても教  
育の発展に寄与し、教育やキリスト教活動に尽力する。

以下榎本敏氏（ジャパントイムズ社長令嬢）談を紹介する。

総督ご在任中最も心を注がれたのは、日本の朝鮮統治の真相を米国によく理解  
して貰うという点でした。当時朝鮮には米人宣教師が百人以上いて、その人達  
が時機がきて帰米する時は、必ず夕食に招じ、日本の統治をどこまで理解され  
ているか確かめられ、誤解の点があれば徹底的に説明されるという風に最後  
まで手を尽くされました。海軍大臣時代の秘書官をされた山梨大將が、かつて  
太平洋でビショップ・ウェルチ（在鮮基督教界の最長老）と同船され、談、子  
爵のことに及んだ時、ウェルチ監督は子爵の写真を肌身はなさず常に持ってい  
ると申され、懐中から出して見せられた由、同大將から承りましたが、子爵が  
如何に米人からの信望が厚かったかを物語る挿話であります。「斎藤實夫妻を偲  
ぶ」より

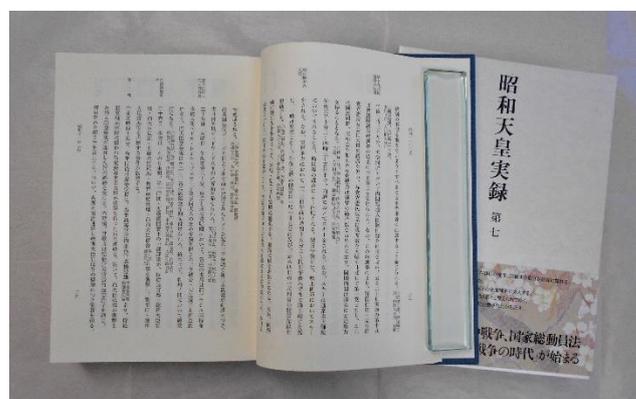
「其の当時私が常に感激して居りました事は、齋藤全権が如何に英語に堪能であられたかと云う事であります。私共の様な通訳は全然必要が無かったと思わざるを得なかったのであります。尚その上英米両国の代表者達は、齋藤全権を衷心より尊敬されて、様々なる問題に関し齋藤全権の意見を求められ、其の為全権のホテルを殆ど毎日の様に訪問されたのであります。此の様な態度は齋藤全権の御人徳を敬慕する現われであると常に感激して居ったのであります。」

～小松隆談～「齋藤實追想録」より

「昭和7年5月故子爵が総理大臣になられたとき、私は法制局長官を拝命一年後に内閣書記官長として9年7月内閣総辞職迄側近に仕えた。(略)総理の施政方針は間もなく開かれた臨時議会で明らかにされたが第一人心の不安を除くこと、第二軍規の振粛に力を尽くすこと、第三不景気対策を講ずることであった。人心の不安は総理の沈着な態度によって漸次緩和の方向に向かい、軍規は陸海軍の努力によって引き締まった。(略)齋藤内閣のこの不景気克服の成功は欧米諸国にも其の比を見ざるところで、世界各国の財政経済の専門学者の間にも宣伝されて居る事実であるとのことである。(略)世上一部に当時の内閣は人心安定には功績があったがその外は消極的であったと評する者があるがそれは大間違で、前述の如く不景気対策には全世界にも稀な成功を収めて居るのである。高橋・山本両長老と協力した齋藤総理の明断によるのである。」

～堀切善次郎談～「齋藤實追想録」より

平成27(2015)年に宮内庁で編纂され東京書籍(株)が発行した。昭和天皇の生涯の言動を確実な記録・文章として叙述されたもの。二月二十七日の記録には「なおこの日、天皇は武官長に対し、自らが最も信頼する老臣を殺傷することは真綿にて我が首を締めるに等しい行為である旨のお言葉を漏らされる。また、御自ら暴徒鎮定に当たる御意志を示される。」という記載がある。

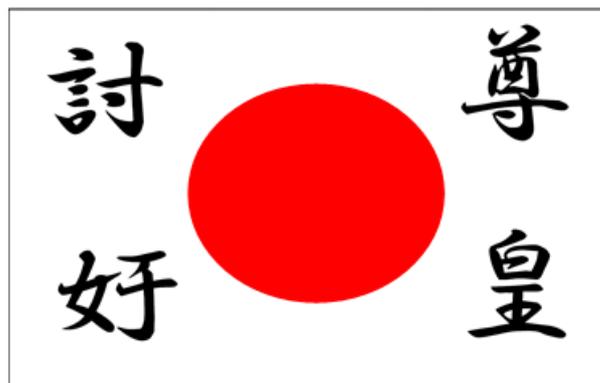


「昭和天皇実録」第七

裁判で思いを明らかにしたいと思っていた決起部隊であったが、実際は非公開の特設軍法会議の場で迅速に行われ、動機の審理もなく大半が有罪判決を受ける。公判記録は戦後所在が不明となっていたが、当時陸軍法務官であった句坂春平がのこしていた資料が平成元（1988）年公開され詳細が明らかになった。

### 決起部隊が掲げたスローガン

「昭和維新」「尊皇討奸」を合言葉に君側の奸臣を討ち親権を天皇にお返しすべく国家改新のためのクーデターを起こした



ここからは、事件の<sup>しゅがい</sup>首魁（主犯）として死刑の判決をうけた人物にふれたい。

あんどうてるぞう

**安藤輝三** 明治 38 年（1905）～昭和 11 年（1936）陸軍歩兵大尉

仙台陸軍幼年学校、陸軍士官学校を卒業。同期に磯部浅一がいる。「昭和維新」の必要性は感じていたが、合法的な道を模索していた。部下を巻き込むことにも責任を感じ決起参加に迷い数日後参加を決意。決起当日は 204 名の兵を従えて鈴木貫太郎侍従長官邸を襲撃。安藤は以前鈴木を訪ね時局についての話をしており面識があった。当日も殺すことが目的ではなく自分たちの考え、決意を理解してもらうことが目的だと部下に伝えていた。そのため別の下士官が鈴木を撃つも安藤はとどめを刺さなかった。これにより鈴木は一命を取りとめる。

こうだきよさだ

**香田清貞** 明治 36 年（1903）～昭和 11 年（1936）陸軍歩兵大尉

熊本陸軍幼年学校から陸軍士官学校へ進み卒業、同期にはともに決起した村中孝次がいた。同じ連隊にいた栗原安秀の推薦で結婚する。結婚後は政治的な活動に関心を深め、自宅には革新運動に賛同する将校が集っていた。当日は反乱軍主力部隊を率いて陸軍大臣官邸を占拠し、村中らとともに陸軍上層部との交渉にあたる。処刑直前には「天皇陛下の万歳三唱をしよう」と呼びかけた。

のなかしろう

**野中四郎** 明治 36 年（1903）～昭和 11 年（1936）陸軍歩兵大尉 自決

東京陸軍幼年学校、陸軍士官学校卒業。父親も退役陸軍少将で、兄・弟とともに陸軍の軍人。決起将校の中で最も維新の念を強く持っており、「蹶起趣意書」を草案し、筆頭者としてその名を記している。野中自身は職務に熱心で、派閥抗争や革新運動にも名前があがっておらず、民間人だが首魁として処刑された西田税の聴取書でも「面識がない」とされている。しかし安藤が蹶起の勧誘を断った際には強い言葉で叱ったという。拳銃自決の件は旧知の間柄であった井出宣時大佐からの説得或いは強要の説がある。

くりはらやすひで

### 栗原安秀 明治41年(1908)～昭和11年(1936) 陸軍歩兵中尉

父親が陸軍軍人であったため、中学卒業後陸軍士官学校に入学する。中学生の頃から国家改造思想に感化され仲間と議論していた。同じく二・二六事件で叛乱罪(群衆指揮等)で死刑となった対馬勝雄・中橋基明と同期であった。皇道派の青年将校の中でも磯部浅一とともに急進派として中心的な存在であった。昭和6年10月に起きたクーデター未遂事件(十月事件)に刺激を受けた栗原は昭和8年11月に「救国埼玉青年艇身事件」を主導し、政界の重臣を狙うが未遂に終わる。その後「相沢事件」が起きたことで、栗原は国家改造クーデター決起への意思を固めることとなる。

いそべあさいち

### 磯部浅一 明治38年(1905)～昭和12年(1937) 元陸軍一等主計

父親が軍部のエリートであった他の青年将校とは違い尋常高等小学校から広島陸軍幼年学校を経て陸軍士官学校、幼少期から優秀で中尉に昇進したのちに陸軍経理学校に入り一等主計となっている。郷里の希望の星であった磯部は国家改造への気持ちがより強かったのだろう。二・二六事件の2年前村中らとクーデター事件(「陸軍士官学校事件」)を計画するも事前に発覚し未遂に終わる。この事件は対立する統制派による冤罪として「肅軍に関する意見書」を配布し免官の処分を受ける。こうして職を奪われた磯部は昭和維新の思いを強くしていく。磯部は上層部の人物と面会し好意的な態度を確信したうえでの決起であった。それゆえ裏切られた思いは強く、家族に残した遺書以外は「獄中日記」「獄中手記」などに激しい言葉を残している。

こうのひさし

### 河野 壽 明治40年(1907)～昭和11年(1936) 航空兵大尉

幼いころから軍人の父親に天皇親政教育を受けていたとされ、昭和6年頃村中孝次と出会い国家改造への思いを強くしたのであろう。二・二六事件では前牧野伸顕内大臣の襲撃を自ら買って出た。神奈川県湯河原の伊藤旅館に滞在していた牧野を民間人を主体とした部隊を指揮し襲撃したが脱出し、計画は失敗に終わる。身辺警護の巡査の応射により重傷を受けた河野は入院中の3月6日に自殺する。



#### 「入間野武雄日記」

昭和7年から斎藤實内閣の総理大臣秘書官兼大蔵書記官だった入間野武雄(斎藤實の母方の従弟)が記した日記。昭和11年2月26日、当時内大臣だった斎藤實が襲撃された二・二六事件当日の様子を、元秘書官の立場から克明に記録してある。

さかいなおし

**坂井直** 明治43年(1910)～昭和11年(1936) 陸軍歩兵中尉

陸軍少将を父に持ち、士官候補生時代に所属していた中隊の区隊長が村中孝次であった。配属先の歩兵第3連隊で安藤輝三と出会い国家改造思想に影響を受けその運動に参加するようになる。二・二六事件では、高橋太郎少尉・安田優少尉らとともに重機関銃4, 軽機関銃8, ピストルなどを備えた襲撃部隊を率いて斎藤實内大臣の私邸を襲撃し殺害。坂井は事件のわずか半月前に結婚したばかりであった。

むらなかたかし

**村中孝次** 明治36年(1903)～昭和12年(1937) 元歩兵大尉

仙台陸軍地方幼年学校から陸軍士官学校を卒業。士官学校区隊長を経て北海道の歩兵第26連隊附になり陸軍大学校に進学する。青年将校の大半が「無天組」(陸大非入学者)であったが、東京で維新運動を行うことを目的とした進学であったといわれている。この頃から皇道派の青年将校の中心人物となり、昭和9年「陸軍士官学校事件」の首謀者とされる。磯部浅一とともに陸軍上層部を内部告発する「肅軍に関する意見書」を公表し免官となる。さらに教育総監真崎甚三郎の更迭は統制派の皇道派弾圧の陰謀であるとする「真崎教育総監更迭事情」を作成し、「相沢事件」のきっかけとなる。

きたいつき

**北一輝** 明治16年(1883)～昭和12年(1937) 思想家 国家社会主義者

新潟の中学を中退し「佐渡新聞」紙上に国体論批判などの論文を発表。弟の早稲田大学進学とともに上京し講義を聴講し独学で社会科学や思想関係の研究をする。明治36年「国体論及び純正社会主義」を自費出版し一部の知識層から絶賛されるが、5日で発禁処分となり警察から要注意人物とされる。その後中国革命同盟会に入党し革命運動に参加。帰国後大正8年に「日本改造法案大綱」を出版。このころから元陸軍少尉の西田税を通じて陸軍の青年将校たちと深く関わるようになる。一方テロを恐れた財閥は情報料の名目で北に賄賂を贈るようになる。二・二六事件では、理論的指導者の内の一人とされ直接関与は行っていないが、死刑判決を受ける。

にしだみつぎ

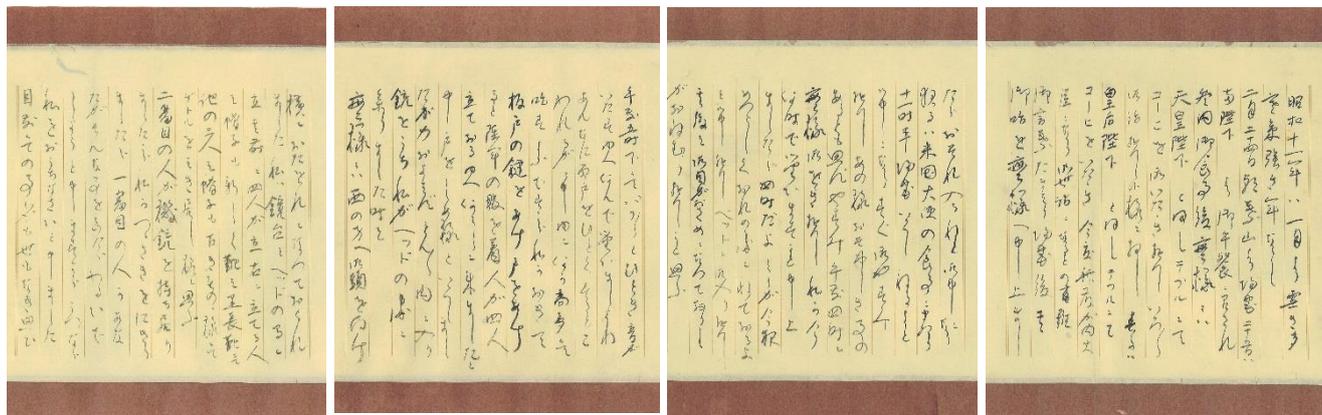
**西田税** 明治34年(1901)～昭和12年(1937) 元陸軍少尉

広島陸軍地方幼年学校から陸軍士官学校を卒業。在学中から北一輝の思想に傾倒していく、また秩父宮殿下と同期となり親しくするなかで国家改造を強く訴えるようになる。病気のために予備役に入った後は国家改造運動に参加するようになる。大川周明の行地社に入った後次に北の門下となる。革新運動に情熱を燃やす陸軍青年将校の中心となり、北の思想を教えていく。西田の自宅には青年将校たちが集い決起への思いを強くしていく。相沢事件の前日上京あいた相沢中佐は西田の自宅に泊まっている。武力決起に慎重だった西田に二・二六事件の計画はぎりぎりまで伝えず20日頃に決起を知ったという。決起日を磯部らに聞いた西田はもう中止勧告は出来ないと妻に話す。



昭和10年9月9日、「経済更生村」に指定されていた旧紫波郡彦部村に斎藤實が更生事業の視察で訪れた際、当時の佐藤定八村長が揮毫を依頼。昭和11年2月25日に四ツ谷郵便局から発送され、事件後の2月28日に役場に届いた。

最後に齋藤實の妻の春子の手記の一部を紹介する。春子は實が亡くなり、空襲が激しくなった昭和20年3月に實の故郷である水沢に疎開をしその後東京に戻らず余生を水沢で暮らしている。二・二六事件についての手記は昭和38年に記されたもの。



昭和十一年ハ一月より雪多く寒気強き年なりし  
二月二十四日朝葉山より帰宅二十五日ハ  
両陛下より御午餐ニ召され  
参内御食事後實様ニハ  
天皇陛下と同じテブルにて  
コーヒを御いたゞき遊しいろいろ  
御話遊し候ニ拝し春子ハ  
皇后陛下と同じテブルにて  
コーヒをいたゞき今度齋藤が内大  
臣ニなり御世話ニなるとの有難  
御言葉たまはり帰宅後其  
御話を實様へ申上まし  
たらおそれ入るねと御申ニなり  
夜ハ米国大使の食事ニまゐり  
十一時半帰宅いたしねるよと  
御申ニナリスグ御やすみ(略)  
午前五時下にてバリバリとひととき音が  
いたすゆへ何んで御座いましようね  
あんなに雨戸をひとくするとこ  
われるがと申内ニ何か高声にて  
話すよふですから私がおきて  
板戸の鍵をあけ戸をあけ  
ると陸軍の服を着た人が四人  
立っておるゆへ何をしニ来ましたと  
申し戸をしめ様といたしまし  
たが力及はずとんとん内ニ入り  
銃をうち私がベットの處ニ  
参りました時は  
實様ニハ西の方へ御頭を向け  
横ニおたをれニなつておられ  
ました私ハ鏡台とベットの間に  
立ち其前ニ四人が立ち右ニ立てる人  
は帽子も新しく靴は黒靴にて  
他の三人は帽子も古きもの、様にて  
ゲトルをはき居し様ニ思ふ  
二番目の人が機関銃を持ち居り  
ましたから私かつ、さきをにきり  
ましたら一番目の人かあな  
たがそんな事したらわるいで  
しようと思しますからうつなら  
私をおうちなさいと申しました  
目前にての事身も世もなき思ひ

＜展示資料一覧＞

資料名	備考
1 蹶起趣意書	
2 昭和天皇実録 第七巻	宮内庁編集
3 滞日十年	ジョゼフ・C・グルー著
4 扁額「處萬變主一敬」	紫波町所蔵 (当館寄託資料)
5 春子手記入間野日記	
6 入間野日記・写真	
7 検察秘録 二・二六事件 I～IV 匂坂資料 5～8	

＜参考文献一覧＞

子爵齋藤實傳 第1巻～第4巻 (1942, 財團法人齋藤子爵記念會)  
「昭和天皇実録 第七」(2016, 宮内庁)  
原秀男ほか編「検察秘録 二・二六事件 I～IV 匂坂資料 5～8」(1989, 角川書店)  
澤地久枝著「雪はよごれていた」(1988, 日本放送出版協会)  
澤地久枝著「妻たちの二・二六事件」(中央公論社)  
河野司編「二・二六事件獄中手記遺書」(1989, 河出書房新社)